

ヨハネによる福音書 21 章 15～19 節

はじめに

- ・前回（8 月）に続き、「ヨハネによる福音書」の最終章（21 章）から御一緒に学びたいと思います。今月はその 2 回目で、15～19 節が学びの箇所になります。
- ・前回も申し上げたとおり、21 章は最終の編集者によって 後年、^{ほい}補遺のような形で付加されたと考えられています。ですので、追加のその 21 章を先に読み通し、その後改めて ^{のち}初めの 1 章に移るといふ幸いです。
- ・さらに、21 章の学びも、逆引き的に節を戻るようにして行なっています。今月は前回の直前の箇所で、前回に先立つ部分です。そのようにして、前後の文脈の全体を押さえつつ、出来事の流れの連続性に目を向けたいと思います。そうすることで、しばしば、そこに置かれたメッセージの核心がよりさやかに浮かび上がってくるからです。

ペトロに対する、イエス・キリストの「^{ほっかい}牧会命令」

- ・今回の箇所は一般に、「ペトロに対する、イエス・キリストの『^{ほっかい}牧会命令』」と呼ばれます。イエス・キリストがペトロに対し、次のように繰り返し、御自身の群れを^{ぼく}牧するよう指示されているからです。

「わたしの小羊を飼いなさい」(15)

「わたしの羊の世話をしなさい」(16)

「わたしの羊を飼いなさい」(17)

- ・さらには、（ペトロのそれまでの^{うよきよくせつ}紆余曲折を背景とした）主イエスとペトロの問答やペトロの殉教予告も含め、初代教会誕生期におけるリーダー・ペトロの回復・復権の箇所と言われたりもします。

気にかかる言葉のあれこれ

そこに何か、大切なメッセージが？

- ・それにしても、今月の箇所には幾つか、気にかかる言葉がありはしないでしょうか。じっくり考えながら読んでみると、どこか不思議にも感じられる言葉です。しかも、もしもそこに何か、大事な意味合いが隠されているとしたなら……。
- ・今回はそんな気にかかる言葉のあれこれを拾い出し、それらを糸口にして、大切なメッセージを聴き取っていただきたいと思います。

1. 「食事が終わると」(15)

まずは舞台の設定ですが、時は食事の終わった直後といます。

だとしたら、そこにある「情況」とはどんなものだったでしょうか。
誰がどのようにしてそこにいたのか、その心の内はどんなだったか・・・等々。
想像力を働かせてみると・・・。

2. 「イエスはシモン・ペトロに・・・」(15)

どうして「ペトロに」なのでしょう？

ペトロが弟子たちのリーダー格だったからでしょうか。

それ以外にも、何らかの意味合いが込められているのでしょうか。

だとしたら、それはどんな？

3. イエス・キリスト：「この人たち以上に・・・」(15)

主イエスは「人と比べて、あなたは・・・」と、「比較（や競争）」の問いをなされたのでしょうか。

もしそうだとしたら、そのような問いかけをなさった理由は何だったのでしょうか？

それとも、問いの真意は別のところにあったのでしょうか。

だとしたら、それはいったい、どのようなものだったのか。

メッセージの重要な部分に通ずる一言^{ひとこと}のようにも感じられます。

4. イエス・キリスト：「わたしを愛しているか」(15、16、17)

信仰の問答であれば、「(わたしを) 信じているか」と問うのが普通ではないでしょうか。

なのに、主イエスは どうして 「(わたしを) 愛しているか」と問われたのでしょうか？

これもまた、信仰というものの本質に繋がる問いかけのように思われるのですが・・・。

5. ペトロ：

① 「あなたをご存じです」(15)

② 「あなたをご存じです」(16)

③ 「あなたは何もかもご存じです。

・・・あなたはよく知っておられます」(17)

(主イエスの問いかけに対する) ペトロの応答の言葉に変化が見られます。

そこに見られるのは、緊張を解かれていくペトロの心情でしょうか。

それとも、逆に何事かが深まり、思いが密になっていくペトロの姿でしょうか。

ペトロの内^{うち}にいったい、何が起^{おこ}っているのでしょうか。

6. ペトロ：「悲しくなった」(17)

「悲しくなった」というペトロのその内側で、このとき どんな思いが進行していたのでしょうか。

ペトロの悲しみとはいったい、どんな内容のものだったのでしょうか？

ペトロのこれまでの歩みを振り返りつつ読み返すとき、それが見えてきはしないでしょうか。

さらには、21章全体の文脈を前後に行き来^{ゆきき}して読み返すと、どうでしょう？

この瞬間がペトロのこの^{のち}後の務めにどれほど重要な意味を持ったか。

それもまた、見えてくるように思われます。

7. イエス・キリスト：

- ① 「食事が終わると・・・」 (15)
- ② 「二度目に・・・」 (16)
- ③ 「三度目に・・・」 (17)

主イエスは どうして、3度も「わたしを愛しているか」と問われたのでしょうか。

そして、どうして、3度も「わたしの (小) 羊を飼いなさい」と命じられたのでしょうか。

「3度」ということに、何らかの意味があるのかどうか。

あるとしたなら、それはどんな意味なのでしょう？

最大の不思議？：やり取りの言葉の変化

・残るあと一つは、時に この箇所最大の不思議と言われたりもする言葉の問題です。

それは、「愛しているか」「愛している」と問い・答えるイエス・キリストとペトロの その二人の言葉がずっと同じものではなく、2つの言葉が入り混ざって用いられているということです。しかも、(ペトロは一貫して、同じ1つの言葉を使っているのに対し) 主イエスは最後の3度目に、それまでの2回とは言葉を変えておられます。

・問題は、そこに何か、メッセージとして読み取るべき大事な事柄があるのか否か、ということです。

似たような類語を頻繁に用いるヨハネ福音書の特徴、現場で元々語られた言葉はギリシア語でなくアラム語だったと考えられること (そのアラム語の表現からすると・・・?)、二人の受け答えの様子、前後の文脈全体の流れ・・・等々を考え合わせるとき、はたして どんな推論に至るのでしょうか。実際、専門の学者の間でも、見解は必ずしも一致していません。

・御参考までに、当該部分のやり取りを以下に記しておきます。イエスとペトロの間の3度のやり取りは、原語のギリシア語では次のようになっています。③の()内は、新共同訳で「三度も、『わたしを愛しているか』と言われたので、悲しくなった」と訳されている部分です。

イエス

① ^{アガバース} ἀγαπᾷς ^メ με; (15 節)

② ἀγαπᾷς με; (16 節)

③ ^{フィレイス} φιλεῖς ^メ με; (17 節)

(τὸ τρίτον = φιλεῖς με;

ペトロ

①' ^{フィロー} φιλω ^セ σε

②' φιλω σε

^{エリウーペーセー} ἐλυπήθη)

③' φιλω σε

・2種類の語が使われていると言いましたが、それらは "ἀγαπᾶς" と "φιλῶ/φιλεῖς" の2つです。それぞれ、"ἀγαπᾶς" は "ἀγαπάω" の変化形で、"φιλῶ/φιλεῖς" は "φιλέω" の変化形で用いられています。そして、(一般論として) "ἀγαπάω" がいわば「神的な、高次の愛」を意味するのに対し、"φιλέω" は「人間的な、それより幾分低い愛」を表わすと言われることが少なくありません。御覧のとおり、イエス・キリストは(ヨハネ福音書編集者のギリシア語表現では)3度目に "ἀγαπάω" から "φιλέω" へと、問いのその言葉を変えておられます。

・ということから、今回の箇所をめぐって様々な読み取り方が出てくるわけですが、それらは大きく分けて、次の3つに分類整理することができるでしょう。

A. 2つの語の使用にさしたる意味を認めない立場 (両語にそれぞれ別の訳語を当てはするものの、そこに有意な意味的違いがあるとは考えない立場も含む)

B. 2つの語の使用に意味を見て取る立場

C. その他 (上記「A」「B」双方の可能性の併記)

・皆さんははたして、どのような理解の仕方をなさるでしょうか。

また、どこに・何に 最も大事なメッセージのあり処を見て取られるでしょうか。

そして、それはいったい、どんなメッセージでしょうか。

(この項については、BFC「聖書読解余滴」に掲載の「優しさの奥行き(2)」で詳細を扱っています。ぜひ、あわせて御覧ください)

ペトロの派遣と殉教の予告

・こうした問答の後、ペトロに何が告げられたかという、それは彼の派遣と殉教の予告でした。

「若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた」(18)

・「自分で帯を締めて」とは、着ている物が纏わりつかないように、すなわち動きやすいように腰に帯を締めて、ということでしょう。ペトロは若いとき、そのようにして、行きたいところへ自由に行っていたのでした。

「しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、
行きたくないところへ連れて行かれる」(18)

・「両手を伸ばして」とは、お縄を頂戴する風な様を想起させます。

・「他の人に帯を締められ」とは、腰に紐を巻かれて引き立てられる姿でしょうか。

・「行きたくないところへ」とは、まさしく「殉教の場所に」ということでしょう。事実、続く19節で、次のような説明が加えられています。「ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである」(19)

[参考] ペトロは最終的にローマにまで赴き、そこに教会を建て、そして殉教の死を遂げたとされています。紀元の60年代(64年～)のこと、あの悪名高いローマ皇帝ネロの治世下ででした。イエス・キリストと同じように、十字架刑によるものだったと伝えられています。

.....

それにしても、今月の箇所くらい、読む人の読み取りや理解の仕方が様々なところもそうないように思われます。その意味では たしかに、少しばかり面倒な箇所と言えるかもしれません。けれども、（聖書というのは往々にしてそうであるように）そうしたところにこそ、深くて豊かな 恵みに満ちた語りかけが隠されているようにも思います。その宝物を、期待に胸膨らませながら、御一緒に掘り起こしてゆけたらと願います。今月の聖書は はたして、この私たちにどんなメッセージを届けようとしているのでしょうか。